

和田修一先生のご退職にあたって

法学部長 石上 泰州

本学法学部教授の和田修一先生は、平成一五（二〇〇三）年四月に本学へ着任されて以来、およそ二〇年の長きにわたって、本学の研究、教育、そして大学運営に、誠心誠意、力を尽くしてくださいました。先生が本年度末をもって退職されるにあたり、私たち一同、謹んで先生に本号を献呈させていただき、先生の本学へのご貢献と学恩に深く感謝を捧げたいと存じます。

先生は、昭和三〇（一九五五）年、宮城県仙台市のお生まれです。先生は、早稲田大学社会科学部をご卒業後、同大学院の政治学研究科へと進学され、本格的に政治学の研究の道に進まれますが、その最中、一転して、政治の現場へと身を置かれることとなります。政治学者の関嘉彦先生（東京都立大学教授、早稲田大学客員教授を歴任）が、昭和五八（一九八三）年の参議院選挙に民社党の比例名簿第一位の候補として出馬され、めでたく当選された際に、先生は、関先生の公設第一秘書となられたのです。大学院の指導教授である内田満先生が、関先生から、調査能力のある有能な秘書の紹介を依頼されたところ、和田先生に白羽の矢が立ったとうかがっております。

関先生の議員活動を最側近としてサポートされた先生は、関先生の任期満了と同時に国会を離れられ、再び、研究の世界へとお戻りになられます。外交・安全保障の分野において日本を代表するシンクタンクである、財団法人平和・安全保障研究所、次いで、財団法人日本国際交流センターが、先生の新たな職場でありました。政治の現場でのこ

経験をもとに、研究者として活躍されるというキャリアパターンは、米国における政治エリートが政府と民間を行き来する「回転ドア」そのものであり、当時の我が国では珍しい例であったのではないかと拝察します。

この間先生は、各国の軍備状況を報告する「ミリタリー・バランス」を発表していることで知られるロンドンの名門研究所、I I S S (International Institute for Strategic Studies) の客員研究員にもご就任された他、毎年のように海外を飛び回っての現地調査プロジェクトを実施されるなど、国際政治学者として豊富なご経験を重ねていかれました。

こうした調査・研究生生活の傍ら、先生は、東洋大学等で教壇に立たれるなど、教育活動にも関心をお寄せでいらっしやいましたが、本学にとりましては誠に幸運と申すべきご縁がございまして、二〇〇三年、国際政治学の担当者としてご着任いただく運びとなったわけです。

先生のご専門は、国際政治、米国研究ですが、なかでもとりわけご関心を注がれておられるのが、冷戦期における米ソの外交政策の決定過程のご研究と申せましょう。数多ある先生の著作、論文のなかでも、『米ソ首脳外交と冷戦の終結』と『レーガン、ゴルバチョフ、ブッシュー冷戦を終結させた指導者たち』の二つの大著は、先生の主著とも申し上げるべきご業績であろうかと拝察いたします。

こうしたご研究の成果は、「国際政治」「安全保障論」「地域研究(米国)」などの講義、さらにはゼミナール等において、本学の学生に惜しみなくご教授いただきました。いずれも多くの学生を集め、また、学生の関心や満足度の高い人気講義でありましたのは、申すまでもございません。以前、先生の講義に参加させていただく機会がございましたが、講義資料がきわめて周到に準備され、かつ、受講生に対するサービスピ精神にもあふれておりまして、講義に向き合う先生の真摯な姿勢や授業スキルに対して、大いに勉強させていただいたことを憶えております。

また、和田ゼミナールの「デイベート」は、大学祭の恒例イベントでございました。デイベートは、最近はやりのアクティブラーニングの代表例とされておりますが、先生は早くからその教育効果に着目され、ゼミでの学生指導に導入されておられたのです。大学祭では、デイベート、及びその準備を通じて仲間意識を高め、一回り大きくなったかのようなゼミ生を満足そうにながめられる先生のお姿が印象的でした。

他方、学内運営の面におきましては、まずは、「防災の和田先生」でございましょうか。ご研究の一環として危機管理全般にご造詣が深いこと、あるいは、東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県のご出身であることも関係していたのでありましょう、学長をトップとする防災対策委員会におきまして、長らく副委員長として、実質、全般を取り仕切ってくださいました。先生のお仕事ぶりはまさに精力的と申し上げる他なく、現在の本学の防災対策は、基本方針からマニュアルに至るまで、すべて先生の手によって作成されたものと申し上げて過言ではありません。

社会・情報科学研究所の所長としても、先生は多くのご功績を残されました。本学では異例ともいえる国際シンポジウムの開催につき、企画から財源の調達を含め、万端取り仕切っていたのが記憶に新しいところであります。が、本学教員の研究活動への支援を拡充強化するべく、学内の研究助成制度の改善を主導していただいたことも、忘れるわけにはまいりません。

もとより、先生のご活躍は学内にとどまるものではなく、海外も含め、各所からひっぱりだこの感がございました。例えば、海外の著名な雑誌等において、我が国の国際政治上の主要な論点について、先生は度々英文で発信されておられました。また、先生は、政策研究フォーラムの役員を長くお務めになり、現在は常務理事としてご活躍です。同フォーラムが発行する『改革者』は、先生のご健筆に度々ふれることのできる、知る人ぞ知る雑誌ですので、皆様にはぜひご覧いただければと存じます。

さて、先生は、ご生誕の地、仙台を本拠地とする、楽天イーグルスをこよなく愛する「野球狂」でもあります。ご退職後は、野球観戦に充てる時間も少しは増えるのではないでしょうか。先生の新たなご研究生生活が、実り多き、また、楽しくエキサイティングなものとなりますことを、心より祈念いたしております。

常日頃、頼りになる大先輩として何かにつけてご相談をさせていただいております身といたしましては、先生のご退職には唯々寂寥感を覚えざるをえませんが、あらためて、本学への深甚なるご貢献に衷心よりの謝意を捧げまして、御礼の言葉とさせていただきます。和田先生、誠にありがとうございました。